

## 社会教育施設の自己紹介

### 【施設名】

名古屋市美術館

### 【施設概要】

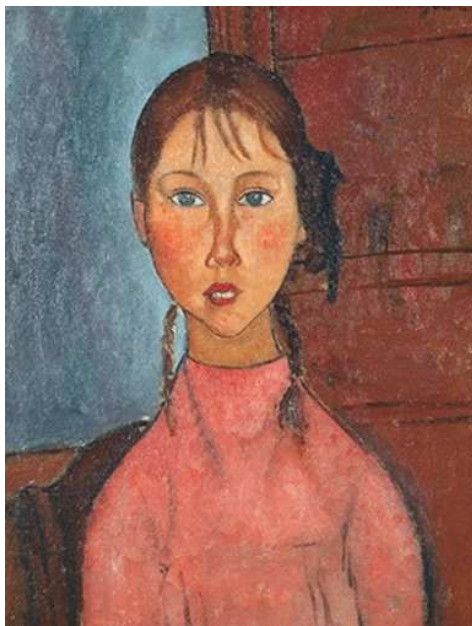
名古屋駅から地下鉄で1駅先、ショッピングエリアとオフィス街として賑わう名古屋の中心地に、都市の喧騒を忘れさせる緑豊かな白川公園があります。この便利で落ち着いた環境のなか、名古屋市美術館は1988年4月に開館しました。

公園の中で隣接する名古屋市科学館とともに、子どもから高齢の方までたくさんの人々に親んでいただき、開館からの来館者は2003年にはのべ800万人を超えました。来年2008年には開館20周年を迎えます。

当館の建築は黒川紀章氏の設計によるものです。樹木に囲まれた敷地であることをふまえて、1層を地下に埋め込み、高さを2階建てに抑えることで、周囲との調和がはかられています。3層吹き抜けのロビーの前面はガラス張りで外光を存分に集め、そこからなだらかな前庭につづく構成は実に開放的な空間を作り出しており、地階にいてもそのことを感じさせません。また、「西欧と日本の文化、あるいは歴史と未来の共生」がこの建築の主要なテーマとなっており、エントランスの鳥居や桂離宮の飛び石など、随所に日本の伝統的手法や色彩が盛り込まれているため、これらの仕掛けを発見し読みとっていくという楽しみがあります。



↑【名古屋市美術館 外観】



名古屋市美術館の所蔵作品は、現在約4000点を数えます。開館以来、途絶えることなく作品の収集を継続できたことで、当館のコレクションは着実に厚みを増してきました。このコレクションは、「エコール・ド・パリ」、「メキシコ・ルネサンス」、「現代の美術」、「郷土の美術」という4つのカテゴリで構成されていることが大きな特徴です。パリで活躍した荻須高德やメキシコで活躍した北川民次など、地元ゆかりのある作家にスポットをあて、彼らに影響を与えた地域・時代へと視野をひろげていくことで、当館はユニークなコレクションを築いてきました。

### ←【モディリアーニの《おさげ髪の少女》】

日本で特に人気の高い「エコール・ド・パリ」のカテゴリでは、代表的な作家であるモディリアーニの《おさげ髪の少女》やシャガールの《二重肖像》といった優品を所蔵しています。また、ディエゴ・リベラやフリーダ・カーロの作品が代表するメキシコ近代

美術のコレクションは、日本で唯一のものです。

また、この地方が輩出した作家には、現代美術の分野において第一線で活躍を続け、日本のみならず国際的に評価の高い河原温、荒川修作、桑山忠明がいます。この3作家については、初期から最近までの重要な作品をおさえることで系統立ったコレクションを達成しています。

こうしたコレクションを紹介する常設展では、1年に3回の展示替えを行っています。モディリアーニの《おさげ髪の少女》や、アンゼルム・キーファーの《シベリアの王女》といった人気の高い作品は、お客様がいつ来ても見られるように配慮しながら、単調にならないようシーズンごとにテーマを設けて作品を展示しています。また、コレクションの4つのカテゴリーにあわせて、当館の常設展示室の壁面は「赤、緑、グレー、白」に塗り分けられていますが、これもまた日本の美術館ではめずらしい取り組みです。



↑常設展示室（エコール・ド・パリ）

特別展では、「ピカソ展」や「ゴッホ展」、「ルノアール展」、「モネ展」、「マグリット展」など、海外の有名作家を紹介する大規模な展覧会を開催してきました。

一方で、「日本のシュールレアリスム展」や「現代美術のポジション」、「心で見る美術展」、「カップルズ：おとなのための美術鑑賞ゼミナール」など、テーマ性の強い展覧会の開催も当館の特徴です。休日には子ども向けのプログラムを実施したり、展覧会ごとに解説会や作家をまねいての講演会を開催するなど、美術の普及事業やイベントにも積極的に取り組んでいます。

※ 名古屋市美術館のホームページ：<http://www.art-museum.city.nagoya.jp/>

### 【特色ある取組】

名古屋市美術館では、こども向けの講座として、1991年から「夏休み子どもの美術館」がスタートし、学校での土日休日制の施行をうけて2003年から「土曜日はキッズの日」がスタートしました。比較的早い時期からこども向けの講座にとり組んでおり、現在まで着実に実績を重ねています。

「たくさんの来館者がコレクションと親しんでいただけるように」という基本的な目的に則ったプログラムが多いことが当館の教育・普及活動の特徴です。

ボランティアによる常設展のギャラリートークは、そのもっとも象徴的な活動で、1998年から今日まで規模を縮小することなく続いています。一般の来館者を対象とする約1時間のツアーで、休館日をのぞく毎日、午前11時と午後2時に行われています。事前の申し込みは不要で、希望者はツアー開始時刻に展示室の入口に集まることで参加できます。

当館の場合は、ボランティアが美術の専門家としてではなく、来館者（市民）の代表として立場を同じくしながら、ツアーに参加する人の興味や関心に寄り添って会話をすることを第一の目的としています。恥ずかしさや自信のなさから、来館者が口にできない感想や疑問を、ボランティアが寄り添うことによって引き出し、それを肯定しはげますことによって、美術鑑賞をより積極的に楽しんでいただくのがねらいです。ギャラリートークに参加された来館者からは、「難しい説明があまり好きでない私はいつも勝手きままに美術館をぶらつくのですが（…）ほんとに楽しかったです」「時間つぶしのつもりで立ち寄った常設展が、今まで経験したことがないほど充実したものとなり、感謝しております」と、ボランティアに宛ててお礼の手紙をいただいています。



#### ←【ボランティアによるギャラリートーク】

ボランティア制度は1998年に20名でスタートし、現在は67名が登録、2007年10月には新たに30名が加わる予定です。新規ボランティアは登録前に全11回の「ボランティア養成講座」を受講します。学芸員によるコレクションについての基礎知識のレクチャーと、先輩ボランティアを交えて行うギャラリートークの練習

がその主な内容になりますが、そのほかにこどもを対象に行うゲームの体験や親睦会もおりこんで、交流の活発なボランティア活動の下地が築けるように配慮しています。

登録後は、月に1度の「定例会」を設けて、ボランティア相互の情報交換と学芸員の美術講座を行っています。当館のボランティアは所蔵作品やヴィジュアル・リテラシーについての勉強会、美術館職員も交えた親睦会、あるいは愛知県下の芸術系大学への実技研修を自主的に計画・実施しており、コミュニティ形成の場としての美術館は、さらに主体的な学びの場として、ボランティアに対しては一定の役割を果たしているように思えます。

当館にとって貴重な戦力であるボランティアは、学校から生徒が団体で見学にやってくる時、また美術館側が学校をたずねてゲームやレクチャーなどの普及活動をする時、ガイド役またはサポーターとして大車輪の活躍です。

毎年2000人以上のこどもたちと交流の機会があることになりましたが、だれよりも当館のコレクションに親しみをもって接していただいているボランティアからのことばは、多くのこどもたちに届いて、彼らが好意をもって美術作品を受け入れる大きな要因になっていることでしょう。

#### 【来館者の推移】

平成18年度：347,052人  
平成17年度：196,062人  
平成16年度：196,020人  
平成15年度：137,430人